

要 旨

本研究は、T T授業において、生徒同士が互いに学習に対して助け合い、励まし合う活動を行った。このような「学び合い」活動を通して、英語によるコミュニケーション能力を支える基礎的・基本的な内容の定着を図るT T授業の在り方を探ることである。英語学習におけるインプットからアウトプットへの活動において生徒同士で取り組ませ、互いに考えを伝え合う場面を多く設定した。そのことで、生徒一人一人が意欲を高め、学習内容の理解を深めることができた。「学び合い」活動は、学習内容を理解させ、定着へとつなげるために有効であることが分かった。

〈キーワード〉 ①T T授業 ②「学び合い」活動 ③英語学習への意欲 ④分かる喜び

1 研究の目標

中学校1学年英語科の授業において、生徒同士が積極的にかかわる「学び合い」活動を取り入れ、英語学習の基礎的・基本的な内容の定着を図る効果的なT T授業の在り方を探る。

2 目標設定の理由

中学校における外国語科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」¹⁾ ことである。目標の中の最重要項目とされている実践的コミュニケーションへとつなげていくためには、文法規則や語彙などの知識量を増やす活動を基に情報を発信する作業が不可欠である。この作業を他からの修正を受けながら繰り返すことで基礎的・基本的な内容が定着していくものである。

佐賀県では、学習課題やその達成状況に応じて、少人数による授業やT Tなど一人一人を大切にしたいきめ細かな指導が進められて3年目になる。平成18年度佐賀県小・中学校学習状況調査によると中学校1年生の英語科授業では8～9割近くの中学校でT T授業が行われている。教師にとってT T授業は習熟度が十分ではない生徒への対応ができ、満足度が高い。同年度の基礎学力向上のためのT T授業非常勤講師配置事業～英語のT T授業に関する意識調査～では、「指導内容を理解できた生徒が増えた」、「子どもたちが楽しく勉強するようになった」と回答した教師はそれぞれ84%、48%であった。しかし、「勉強が分かりやすくなった」、「勉強が楽しくなった」と回答する生徒はそれぞれ49%、32%であり、教師の意識を大きく下回るものであった。これは上述の小・中学校学習状況調査T 1・T 2の役割分担に関する調査によると、約6割の中学校においてT 1の一斉授業の中でT 2が個別指導で補佐をするという指導形態のために、一部の生徒のみが満足していることが原因の1つと考えられる。すべての生徒が、分かる喜びや達成感を感じるには、生徒の活動の量を増やし、質を高めたT T授業が求められる。

そこで、T T授業に「学び合い」活動を取り入れ、基礎的・基本的な内容の定着を図るための授業の在り方を探っていきたいと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

複数の教師の支援のもと、生徒同士の「学び合い」活動の場を設定する。そうすることで、それぞれの理解の段階にある生徒同士が課題に取り組み、互いに新しい発見や理解を深めることができ、基礎的・基本的な内容の定着へとつなげることができるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) TT授業指導方法と「学び合い」活動について文献や資料を基に理論研究を行う。
- (2) 理論研究を基に、TT指導と「学び合い」を効果的に取り入れた指導計画作成を行う。
- (3) TT授業と「学び合い」活動を取り入れた学習指導案を作成し、所属校の1年生で検証授業を行う。
- (4) 「学び合い」活動を取り入れたTT授業に対する生徒への調査を検証授業前後に行い、生徒の変容を分析する。
- (5) 授業について検証を行い、仮説の有効性を考察し、研究のまとめを行う。

5 研究の実際

(1) 実践へ向けて

ア 基礎的・基本的な内容の定着と「学び合い」活動

「英語の力のある生徒→基礎的な英文をできるだけ数多く頭の中に蓄積し、それを必要に応じて出していける生徒」²⁾と齊藤栄二が述べているように、英語の力には4領域における基礎固めが必要である。この基礎的・基本的な内容の定着こそが実践的コミュニケーション能力を支える力である。この力を培うためにも、基本文をインプットし、アウトプットする活動を繰り返し、そこに生徒同士がかかわる「学び合い」活動を計画的に取り入れた。この「学び合い」活動を取り入れた授業では、生徒一人一人に題材に対し「個の考え」をもたせた後、「他」とかかわらせることが大切であると考えた。それは「個」が学んでいくためには、生徒自身が違った考えに気付くことが必要だからである。そのような「気付き」により修正され、深まった考えは「個」の中で整理され定着されていくものと考えられる(図1)。

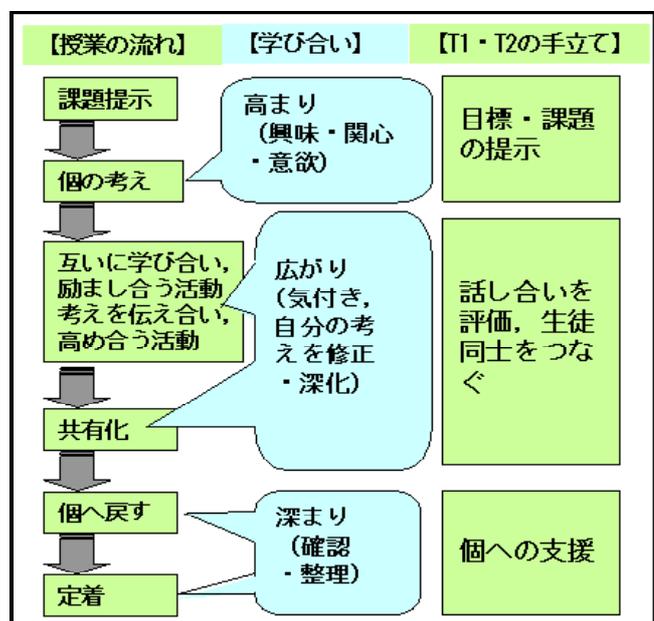


図1 「学び合い」活動を取り入れたTT授業

イ 「学び合い」活動を取り入れたTT授業でのT1・T2の役割

TT授業では教師1人での一斉授業に比べるとメリットが多くある(表1)。その中でも、物理的に役割が分担できるというTTのメリットを生かし、「①生徒に活動の明確なゴールを伝える」「②生徒の意欲を湧かせる」「③観察により生徒同士の考えや活動をつなげる」を「学び合い」活動におけるT1・T2の役割と考えた(図1)。

表1 TT授業のメリット

- ・ 活動モデルによる課題の具体化
- ・ 英語インプット量の増加
- ・ 生徒との会話、インタラクションの増加

ウ 題材とその提示法及び学習形態について

生徒同士が自主的にかかわる「学び合い」活動において、大切とされる生徒の「学習意欲」を引き出すために、生徒の①興味・関心を高め、②活動に対する見通しをもたせることを考えた。そこで、題材やその提示法、学習形態について考えた。

題材に関しては生徒たちに英語を使用する必要性や楽しさを感じさせる状況を設定した。提示

法としては、デジタルカメラ、ビデオ、BGM等の視聴覚機器を効果的に使い、写真、映像や活動モデルを映し出した。また、TTの掛け合いにより生徒にとって教材が具体化され、身近なものとしてとらえやすいものとなるように工夫した。

また、「学び合い」活動の学習形態は様々である。授業においては、座席（生活班）、興味・関心、学習差（習熟度における差）によるペアやグループ及び一斉での活動を取り入れた。

(2) 授業計画と検証内容

単元はNEW HORIZON English Course 1の「Unit 9」と「まとめと練習6 疑問詞」である。これらの単元において「言語材料の把握・理解→インプット活動→アウトプット活動」の各段階で、様々な学習形態による「学び合い」活動を取り入れ、意欲を高めることと学習内容の理解を深めさせることを目標とした。

Unit 9では新出文法事項を生徒が理解し、表現することを目標とした。ここでは、「各地のクリスマスレポート」を作成させ、その後ビデオにニュース番組風に収録するという活動を行わせた。授業1（検証1）では、「現在進行形と現在形の意味及び用法の違い」、授業3では、「否定命令文、be動詞で始まる命令文の構造と意味」を生活班で発見させ、理解させることを目標にした。授業2（検証2）では、前時の言語材料の音読練習後、座席ペアによる暗唱チェックを行わせた。授業4では、アメリカ・オーストラリア・カナダ・佐賀、いずれかのクリスマスについて、1分間のレポート原稿作成を行わせた。授業5で生徒たちはレポートの練習をグループで行い、ビデオに収録した。授業4（検証3）、5は題材を生徒自ら選択し、「興味・関心で構成されたペア・グループ」による活動であった（図2）。

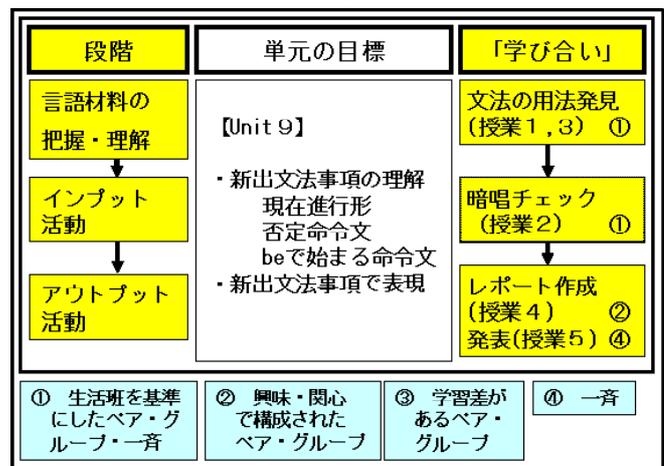


図2 授業1～5（検証1～3）の計画と学習形態

「まとめと練習6 疑問詞」では疑問詞を使った疑問文の復習である。be動詞や一般動詞を含む疑問文は生徒が混乱する文法事項である。授業6（検証4）で、列対抗の「単語カードを使った英文作成ゲーム」で、疑問文についての復習、音読を行わせた。その後、授業7（検証5）で、生徒たちは、疑問詞が使われた疑問文についてのワークシート（次頁図5）を使用し、生徒同士の「学び合い」活動により疑問を解決し、互いに理解を深めた。その後作成した疑問文は、級友とのQ&A活動につなげた（図3）。



図3 授業6, 7（検証4, 5）の計画と学習形態

このような授業において、次のことを検証した。

ア 「学び合い」活動を活性化するT1・T2の手立て

自主的な活動には、生徒自身の目標把握とそれによる動機付けが必要である。そのためには、教師自身が生徒たちの到達目標を明確にすることが大切であると考えた。そこで、授業1（検証1）の事前打ち合わせでは、単元の目標を共通理解し、「学び合い」活動を取り入れたTT授業、

その観察・支援について（表2）、意識の共通化を図った。観察に関しては、グループやペアを分担し、生徒の試行錯誤の様子や言葉、理解度に関することを座席表やメモに残した。それは、次時の「学び合い」活動を活性化させるための資料とした。支援に関しては、①活動がうまく進んでいることを評価する（「ここチームワークがいいねえ」）、②問題提起をする（「そうかな」、「何でそう考えたの」）、③生徒のよい発見や探求法を全体に紹介する（「〇〇さんのやり方を見てみて」）ということを試みた。

授業では、生徒たちに単元目標を意識させ、意欲を高めさせるために、授業1（検証1）では、T1・T2のジェスチャーによる新出文法事項の提示、授業2（検証2）では基本文チェック活動のモデルを行った。授業4（検証3）では、教師がニュースキャスター風に収録した「クリスマスレポート」のビデオを提示した。

このように、T1・T2の掛け合いで題材を視覚的にとらえさせ、課題を具体化させた。このことにより、生徒は目標を正確に把握することができ、活動に対する興味・関心を高め、意欲的に取り組んだ。また、生徒は教師の支援により互いに刺激を受け、活発な交流を行った。

イ 「学び合い」活動における生徒の意欲の高まり

検証授業では、単なるドリル活動だけでなく、互いに考えを交流させる活動を多く取り入れた。ビデオ記録からは、活発にアイデアを出し合ったり、英和辞書を使用し、グループで協力しながら英文を作成したりする生徒たちの姿が見られた。また、収録された「クリスマスレポート」では、生徒たちは聞く側を意識し、視線や身振りを工夫していた。事前事後のアンケート結果によると、「ペア・グループ活動により、自分の学習姿勢を見直し、意欲が高まったと思う。」と答えた生徒が増加した（図4）。活動において、他との支え合いや励まし合いは、「自分も頑張ろう」と学習に対する意欲を高めるためにも有効的であることが分かった。

ウ 「学び合い」活動における生徒同士の新しい発見や理解の深まり

授業7（検証5）では、「疑問詞を使った疑問文を理解する。」を最終目標とし、ワークシート（図5）を使った生徒同士の「学び合い」活動を行った。T1・T2で観察・支援した結果、活発な「学

表2 T Tの観察・支援について

「学び合い」活動を取り入れたT T授業 ～共通理解のために～	
T Tによる 観察について	手立て・観点として
<ul style="list-style-type: none"> 〇 一人一人の関心意欲や学習課題解決までの試行錯誤の様子、つぶやきなどを把握するべきである。子供の発言に徹底して耳を傾ける。 〇 「小さな逆転現象」を見逃すことなく、周囲の生徒に気付かせることで、周囲は意欲的になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発言を聴く、記録を取る。 ・下位生徒のつぶやきで、上位生徒に新たな発見があったかを観察する。 ・上位生徒の説明の言葉の使い方に工夫が見られたかを観察する。
T Tによる生徒の活動の活性化のための支援	具体的な手立てとして
<ul style="list-style-type: none"> 〇 「学び合い」を成立させるために、教師の方から意図的に生徒たちに対立分化が生じるような課題を提起する。 〇 話し合いや活動がうまく進んでいることを評価し、学習者の言葉に耳を傾け、学習者の判断を力づけるための会話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を観察し、話し合いが滞っている場合には問題提起し、声掛けに工夫をする。 ・肯定的な評価を声に出して言う。「ここはチームワークがいいねえ。」「おお！やるねえ。」「分かりやすいねえ。」など他の班に聞こえるように意図的に声を大きくT1・T2で話す。 ・クラスに疑問を広げるためにも、意図的に大きな声で疑問をつぶやきながら教師が歩く。
<ul style="list-style-type: none"> 〇 周囲とかかわることが困難な生徒への支援 〇 リーダーの指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師がかかわる。様子をみながら周囲とつながる。 ・リーダーが班員に一方的に押しつけているようだったら皆の意見を聞くように指導する。 ・生徒が援助を求める(言葉・サイン)まで状況を見ながら助ける。

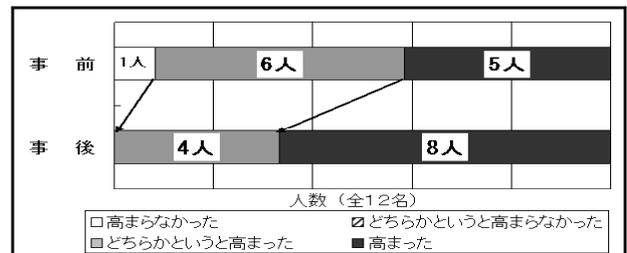


図4 ペア・グループ活動による意欲の高まり

まとめと練習 疑問詞

ワークシート② No. ()

【1】次の疑問文に対する応答として適切なものを選び、記号で答えなさい。

① Where is my bag? ()
 ② Who is Akiko? ()
 ③ Whose cola is that? ()
 ④ How does your sister come to school? ()
 ⑤ What do you do before dinner? ()

ア She is a great singer. オ It is on the desk
 イ I play volleyball. カ I come to school by car.
 ウ She is tall. キ She is thirteen years old.
 エ It's yours! ク She comes to school by bike.

【2】()に適切な語を入れて、次の対話文を完成させよう。

① A : () does Ken () math?
 B : He studies math in the morning.
 ⋮
 ⑤ A : () () does it take?
 B : It takes about five minutes. / 10

9. 10 … おめでとう！！
 めでたくあなたは疑問詞リーダーさんです(^^)V。

図5 授業7のワークシート

び合い」活動が行われた（図6）。授業6における16点満点の小テストの結果をA段階（13～16点）、B段階（6～12点）、C段階（0～5点）とし、「学び合い」活動をビデオ記録から分析すると、高得点を得ることはできなかったが積極的に説明する生徒や、1人で数名にかかわる生徒の姿が見られた。図6の中でT1、T2と○で囲んだ生徒は教師が声掛けを行うことで、他の生徒との交流をもつことができた。学習

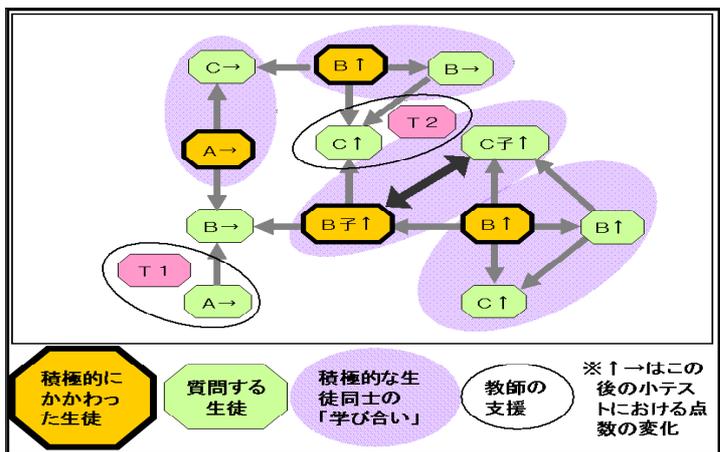


図6 小テスト結果A、B、C段階の生徒の交流状況

差があるペア・グループによる「学び合い」活動は、上位→下位の生徒、同レベルの生徒同士で多く見られた。しかし、図6中央のB子とC子の「学び合い」では、B子（B段階）がC子（C段階）に説明するだけではなく（図7※1、※2）、反対にC子がB子に知識を伝える場面がビデオ記録から見られた（図7※3）。この「学び合い」活動で中心になったのは「三人称単数形とは」「疑問文を作る際にbe動詞とdo, doesどちらを使うのか」であり、生徒にとって混乱する内容であった。ビデオ記録では、初め生徒たちは「何で」や「分からない」を繰り返していたが、生徒同士の「学び合い」活動により、次第に「分かった」や「なるほどね」という姿を見ることができた。

場面：C子がB子に三人称単数形について尋ねる

B子：Sheは女でしょ。「彼女」のことに言ってるでしょ。じゃあ、一人じゃん。女か男か分かってるし【※1】。

C子：じゃあ、なんでisじゃなくてdoesなの？

B子：疑問文だから。

C子：Is this bag~?って言うじゃん。

B子：doと同じことさ。doを三人称単数形にするんだよ。【※2】。

C子：doを三人称単数形にする必要があるの？

場面：B子はその場から離れた後、他の生徒から学んだC子は…

B子：分かったよ。B子ちゃん。be動詞と一般動詞はケンカするけんダメ。

C子：私、be動詞から分かってない。

B子：私、be動詞だけは覚えとって。am, is, are ... 【※3】

図7 B子とC子の「学び合い」の様子

授業7後に行ったアンケート結果では、「学び合い活動により学習内容が理解できた」と答えた生徒の数が大幅に伸びた（図8）。

これらの検証結果から、「学び合い」活動では、生徒同士に互いの知識を伝え合わせることで、文法事項に対する理解を深めさせることができることが分かった。

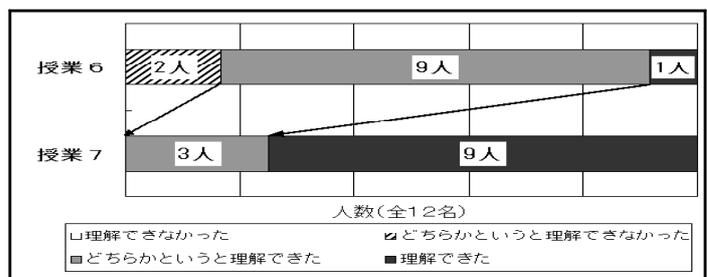


図8 授業6、7における学習内容理解

エ 語彙力、文法事項の定着へつなげるための「学び合い」活動の有効性

授業2（検証2）でのインプット活動では座席のペアによる基本文の暗唱活動を行わせた。一斉で教科書の内容把握と音読を行わせた後、1文2点、計16点の暗唱テストを同ペアで取り組ませた。この活動では、T1・T2からだけではなく、ペアからのチェックもあり、個人の修正フィードバックの場面が増えた。授業後のアンケートから、意欲が高まった活動として半数の生徒が暗唱チェック活動を挙げ、8割の生徒が13点以上を取得した。しかし、暗唱だけでは学習内容を定着させたとはいえないことから、授業6、7（検証4、5）では4技能の中でも正確さが求められる「書くこと」に焦点を絞った。授業6、7で「自分自身のことについて英語で答える」というQ&A形式の小テストで理解度の変容を見た。授業7での「学び合い」活動で理解を深めさせた結果、多くの生徒の点数が上

昇した(図9)。特に、B段階の生徒に大幅な伸びが見られ(図10)、語彙力、文法事項の定着につなげる活動として、「学び合い」活動の有効性が分かった。

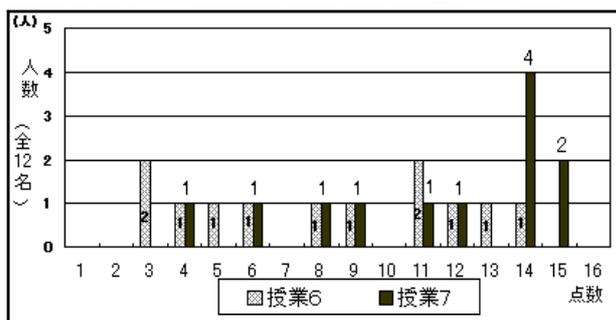


図9 授業6, 7での小テストの点数分布

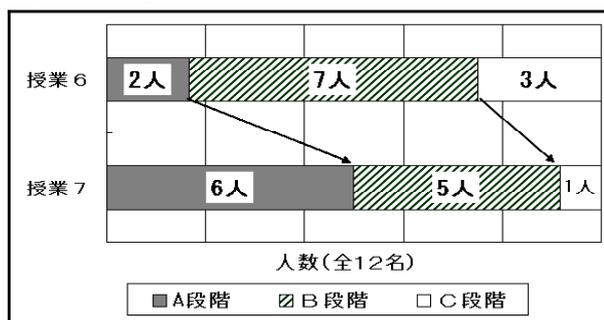


図10 授業6, 7での小テストの結果比較

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア T1・T2の英語による対話や活動モデルで題材を提示したことは、その時間の目標や活動内容を生徒に正確に把握させ、見通しをもって活動させるための有効な手立てであった。また、教師が積極的に視聴覚機器を使用したり、T1・T2の協力で教材を制作したりした。このことは生徒が題材を身近なものにとらえ、題材に対する興味・関心を高め、意欲的に活動するための手立てとして有効であった。このようなTT授業における「T1の一斉授業とT2の個別指導による補佐」という指導形態以外のメリットを再確認することができ、TT授業の質を高めることができた。そして、TTの課題の1つでもある「打ち合わせの時間の確保が難しい」ことに関しても、授業の指針(年間及び単元の目標や、「学び合い」活動とその観察・支援の方法に関することなど)を検証授業1の前に互いに共通理解したことが、その後の打ち合わせ内容の的も焦点化され、打ち合わせ時間の短縮につながった。

イ TT授業に生徒同士の「学び合い」活動を取り入れた結果、TTの支援により、生徒が自主的に課題に取り組み、互いにかかわる場面が増えた。そこで、生徒自身が気づきや知識の伝え合いなどの交流をしたことで、一部の生徒のみではなく、多くの生徒の学習意欲を高めさせ、更に学習内容の理解を深め、分かる喜びを実感させることができた。

(2) 今後の課題

ア 学習内容の定着のためには、「学び合い」活動で理解を深めさせたことを、継続的に活用させていくことが必要である。一斉授業とのバランスを考えながら計画的に取り入れ、実践していきたいと考えている。

イ 「学び合い」活動は、生徒同士がかかわり合うことが多いことから、学級経営と深く関係している。そのため、学級担任との連携を密にしながら進めていきたいと考えている。

《引用文献》

- 1) 文部省 『中学校学習指導要領解説-外国語編-』 平成11年 東京書籍 p. 6
- 2) 斉藤 栄二 『英語授業レベルアップの基礎』 2006年 三省堂 p. 51

《参考文献》

- ・ 三浦 孝・他 『ヒューマンな英語授業がしたい』 2006年 研究社
- ・ 斉藤 栄二 『基礎学力をつける英語の授業』 2001年 大修館書店
- ・ 西川 純 『「座りなさい！」を言わない授業』 2004年 東洋館出版社